Jun. 1891
no. 269

女學雜誌

第二百六十九號
明治二十四年六月十三日發兌

米國女大學實觀記
成瀨仁藏氏が報告の續稿を掲ぐ。

中村敬宇先生
其性行、持論、信念、道德を細論し、日本道德界の一代表者を失ふとして、切に追悼す。

化粧の秘訣及分析
蓬蓬外史が巧妙才慧の筆に成る。

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 269 JUNE, 13TH. 1891.

EDITORIAL:—Dr. K. Nakamura.

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

SCIENTIFIC:—Acid in Fruit. Apples, Grapes etc. Sugar.

MISCELLANEOUS:—"Soga's Attack by Night." (A Poem) Toilette. What I Saw at the "Welesley College." (II) Naruse Jinzō. Carefulness in speech.

LITERARY:—Sonnets.

NOVEL:—"Shikwai no Arashi." (A Story of Persecution in Japan in the 16 Cen.) "Courtship of Miles Standish." (A Translation).

OPEN LETTER.

CRITICAL NOTES.

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

第二百六十九號目次

社説 中村敬宇先生

兒籃 小公子(若松しづ子)。

理學 菓實中の酸素●林檎中の酸●檸檬果中の酸●葡萄菓中の酸●砂糖(吉田伸子)。

雜餘 曾我夜討(韻文)(雲峰子)●化粧(蓮峰外史)●ウエレズレー女子大學觀察略記(二)(成瀬仁藏)。

文學 和歌數首(東京案山子の屋社中)。

隨感 言を慎め(方寸子)。

小說 紫海の嵐(みさを)●マイルス、スタンヂッシュの戀(愛山逸氏)。

批評 春日局(撫象子)●蓬萊曲(雲峰生)●今辨慶(天知子)。

開書 明治の青年に眞英雄を招介す(川合信水)。

時事 時世切迫●停止、中止●實語教●其他數件。

問答 文學者の實名

女報 さま〴〵。

週報

MUSICAL ENTERTAINMENT

FOR THE BENEFIT OF

"MEIJI JOGAKKO."

PROGRAM.

PART FIRST.

Piano Duett.—"Sonata." Beethoven	Miss. TETSU SATO, and Miss. KIKU ARAI.
Chorus.—"Home, Sweet Home"	Pupils of "Meiji Jogakkō."
Vocal Solo. — "Heaven and Earth." Pinsuti..	Miss. J. MOULTON.
Piano Solo. — "Giralda Valse Brillante." Par. Frc. Burguneller	Mr. B. NŌSHO.
Chorus.—"It Came upon a Midnight Clear." Sir. Arthur Sullivan...	Pupils of "Ferris Seminary."
Japanese Music.—"Miyako no Haru."...	Mr. YAMASE and others.
Follies Dramatique.—"Fukitori."......	
Halberd Exercise.—(Naginata)	Pupils of "Meiji Jogakkō.

PART SECOND.

Piano Solo. — Schummeilied Robert Schumann	Mrs. M. GREEN.
Japanese Music.—(Satsumabiwa)	Mr. M. TAWARA.
Vocal Duett. — "The Minute Gun at Sea." and "Love Divine all Love Excelling." ..	Miss. H. LUND. and Miss. LIZZIE HART.
Recitation. — "Queen Dagmar."	Miss. M. PRINCE.
Vocal Solo. — "L'Edasi Valse" by Ardisi	Mrs. TIETZE.
Address.	Mr. S. Shimada.
Japanese Music.—"Midare."	Mr. YAMASE and others.
The Story-teller's Entertainment.	Enchō.

At

"The Imperial Hotel," Yamashitacho, Tokyo. At, 3 p.m. 20. 1891.

(Doors to be opened at 2.30, p.m.)
(Price 1 yen, for 1 person only.)

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百六十九號
明治二十四年六月十三日發兌

社説

敬宇先生（上）

民友氏嘗て新島襄福澤諭吉の二先生を論じ、物質的、靈性的の二つの外來文明、之によりて代表せらると謂へり。大躰に於て當を得たりと雖ども、未だ精を擧るものと云ふ能はず。惟ふに、更に二先生を之に配し、初めて完きとを得んか。中村正直君、加藤弘之君即はち是れ也。

日本が外國の物質文明を吸收すると甚はだ強く、聳然として福澤先生を出しぬ。左れど突如として只だ此人あるにあらず傍はらに加藤弘之氏のあるあり。物質的批評の眼鈍やかあらず、冷々之を鑑識して徐々に之を輸たさんとを欲せり。日本は唯だ商人の如くにして物質文明を欲望せず、亦た哲學者の如くにして之を要めたり。

左れば、其の靈性文明を祈望するに於いても、啻に火山の俄かに裂噴し、燦然として新島先生の中天に翔ひ上りたるにはあらず。同時に、學、和漢梵を兼ね、徳、支那印度の聖人を慕ひたる老儒中村正直先生のあるあり。日本は、渇したる雄鹿が谷川の水を求むるが如く、內煩悶し激切として直ちに西洋教を丸呑にせんとするもの耳にはあらず、深く從來の德教に鑑がみ、驗經踐試して而して大道の味いを承知するの求信者甚はだ多し。日本は、野蠻人が西教を信じたるに類せず、君子が濶然として道の同異を辨知したるに似たるとあり。

今や一派の代表者中村正直先生逝けり。天下志ざしあらんもの、誰か落淚せざらん。左れど、吾黨夙に其薰陶を崇むり、奉敬する所ろ尠なしとせず。同人社の主義、師弟を以て待せず、友人を以て目す。然りと雖ども、同人社にありて多年先生の風采に接したるものは、誰か先生の德に薰せられて、久しく門下書生の心地せざるものあるべき。吾人が先生に對する更に別異の關係あり、他日もし仔細に先生を傳するとを得ば幸はひなり。今まに於て先づ大ひに痛歎する所ろのものは、吾人日本の道德宗教に於て一派の代表者を失なひたると是れ也。請ふ先づ、其一事を言はん。

友人某前年米國に留學せり、或日貴婦人打くつろぎたる時之

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に問ふて曰く、貴君基督敎を信じ思想さほどに高潔に居ますとを祝す、左れど何日の頃ろ之を信じ玉ひしか、亦た信じ玉へりし以前には能く善悪を差別し玉ひしかと。質問の禮を失したるは言ふに及ばず、其恐に於て亦驚ろくべきものありと雖ども、西洋人が日本を見る往々にして如此きとあり。彼等は日本に從來確乎たる道德敎の存せしとを知らず、儒敎の天を敬し情理を重んずるとの甚切なるとを知らず、日本に基督敎行れざりし以前は、日本人は總じて食肉者たりしかの如く暴斷するものあり。

左れど斯く誤解するものは、西洋人のみに限らず、基督敎を信奉する邦人中、亦往々自から卑しみたるの輩あり。彼輩從來日本に存するの道德敎を服膺踐行したるとあらず、懷疑若くは放蕩にして、甞て敬神修德の經驗なし、故に一朝西敎を信じて盲眼直ちに開け、初めて光と云ふものを見たる心地のするなり。左れど、此は基督の徒弟の敎ゆる所ろにも逆へり。ポウロ云く、神は世の初めより万物に現われたり、之を以て人々言ひ逃るべきやうなし、人は皆な良心を存す、其是非する所ろによりて裁判し、義と不義とを分てりと。西敎未だ入らずと雖ども、日本豈に德敎なからんや。日本に一種の文明ありと雖ども、西洋文物の更に便更に益あるに及ばざりしが如く、日本從來の德敎は西敎に會して、大ひに光輝を增したるのみ。未だ初めより些少の光明なかりしと云ふ可らず。深く儒敎を味わひ、敬神修德の覺悟淺からぬ人々は、基督の言を聞きて、大ひに悟發する所ろあらんとす。而して年來の修德、其歩みの或る階段以上に進むとの甚はだ難きを覺へたるもの、釋然として百尺竿頭一歩を登るの極めて容易なるとを覺知すべし。かゝる人々の西敎を見ると、宏大にして寬容なり、沈着にして重剛あり、かの輕薄人が一朝改悟したるものと同じからず。中村先生は、即はち儒敎と西敎との混通融和する形跡を表明したり。

明治六七年の交、民間の學者大率ね民撰議院の設立を痛論し開化の方途唯是のみと思惟したるが如し。先生は云く、

民撰議院創立し、之に由て人民たさひ幾分の政權を上より分ち得たりとも、矢張り從來の人民なれば、政事の形躰少しく變ずる迄の事にてさまでの効功はあらざるなり。人民の性質を改造するは何如と云ふに、その大分二あるのみ、藝術なり、教法なり。

と、此時すでに基督敎を尊重す。想ひ起す、明治八九年の頃ろ、先生屢ば基督敎を講じ、日曜日はカクラン師を招聘して同人社三百の書生に敬神愛人の道を聽聞せしむ。又甞て愛敬

の歌を作り、歌ふて、愛敬を盡せ、愛敬を盡せと言ふ。語句は耳にあり。

保守の熱反動し、世の人切りに基督教を疑がふ。先生則はち「杞憂を誤る勿れ」の說を演ず、

今若し牛肉は歐米人を肥すと雖ども日本人をして痩せしむと云はゞ人誰か之を信ぜん、又若し耶蘇教は歐米を善良ならしむるも日本の國安を妨害すと云はゞ、童子も其不條理なることを知らん、是故に余は耶蘇教の眞面目を以て善良にして弊害なき者と爲すなり、耶蘇教を以て邦國及び人民に健旺なる精神を與ふる者と爲すなり。……和信通商と耶蘇教法とは同一物事にして離折去取す可らざるものなり、和親通商を許したるの日は、即はち耶蘇教を許したるの日なり、和親通商を許したるの運命は耶蘇教を許したるの運命なり。

先生基督教を信ず、然れども儒教を輕んずるにあらず。其の基督教を重んずる所ろの者は、亦た儒教を輕んぜざるの所ろなり。先生の之を見る、西教と儒教と正に同一の天法を示すものなり、

孔子の頭上及び胸中に常に天ありて暫らくも忘れず。曰く罪を天に獲、禱る所ろ無き也と。曰く、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏ると。曰く、天の未だ斯文を喪はざるや云々と。曰く、天德を予に生せば、桓魋其れ予を何如んせん。曰く、予が否む所ろの者天之を厭ひ天之を厭ふと。

孔子の孫子思に至り其の著はせる中庸の開卷第一に、天命之を性と謂ふと云ふ。宋儒が儒佛の異動を論ずるも、儒教は天に本づき、釋教は心に本づくとの點に在るが如し。

先生が確信確認し、造次顚沛の間も忘れざらんことを希圖する所ろのものは、天なり、神なり、造物主なり、上帝あり。自から號して、敬宇と云ふ。天を敬するの念暫らくも止まず。

嘗て「我は造物主あることを信ず」と題し、公けに心念を發表して、稍々其所由を辨ぜり。

先生が基督教理の中につきて先づ確信し得たる所ろのものは、即はち上帝の存在及び其の公美、聖善、全能なると是れ也。先生が、儒教及び漢學に重んずる所ろのものも亦た之に存す。云く、吾の漢學に取る所ろのものは、其主要孔子の宗教分なり、支那の人種をして禽獸に陷いらざらしめしは、是れ有るに頼る耳と。

上帝臨監す、天地の大法、正しからざるはなし、善からざることなしと。之を先生が無上謹嚴の信仰となす。故に、一個人が行爲及び一國の歴史には、神の賞罰明らかに顯はれ、苟くも違ふことなし、世人往々盗跖の長生し、夷齊の困死するを視て、天の律正しからずと云へり、然れども、夷齊は天を怨みずして死せり、之れ大ひに賞せられたるものなり、盗跖は安心を得ずして死せり、之れ大ひに罰せられたるものなり。先

三

生此の理を信じ、エメルソンがコンペンセーションに於て大ひに喜こぶ所ろあり、嘗て譯して報酬論と題し、同好の士に配付す。而して報酬堅實の理を信ずる所ろの思想は即はち先生をして易を尊重せしめたり。

報酬を授くるは神の手にあり、而して報酬の厚薄は一々個人が眞實の品行に對す、人之を如何にともする能はず。之を以て、名擧は、人之を貪ぼる能わず、亦人之を毀つ能はず、天授にして亦た天品なり。先生此理の説に云く、孟子曰く、禍福無不自己求之者、既に得たる名擧は必らず己より求めたる理由のものなれば、決して他人に壞らる可らざるなりと。

歴史は傳記なり。一個人に對する天の賞罰相合して一國の成敗興亡を爲す、其跡昭々として歴史に存す。故に、先生が歴史を觀る亦た此見解による。嘗て、支那の歴史を無用の如くに思ふの謬を論じて云く、

第三世ナポレヲン、其著せる有名の書の序文に曰く、史傳は讀者を感動して善美を愛し公義を愛さしめ又人類の進歩を妨ぐるものを惡ましむるもの也、貴官大職の人の事を記載するに其天命の職分（前定の使命）として其任に當りしとを忘る可らずと。一部二十二史皆な如此觀を爲すべし。歴史を讀めば國の興廢存亡必らず其因ありて偶然に非るを知る、大人君子英雄豪傑の傳記を讀めば、天命の職分を持て此世に生れたるものにして、偶然に非るを知ると。

先生が天を敬し、天命を重んずる大率ね如此し。先生は、儒敎の宗敎分子を大ひに發顯し、西敎に對比して一層之を明白にしたり。身先づ儒敎の德を實踐し、西敎の信仰を之に加へて、彌よ味ひの深きとを驗知したり。嘗て記す、一夕先生の高談を江戸川畔、綠樹茂り世音逸するの窓下に聽く。先生慨然、佐久間象山が揮毫の一詩を指ざし示し、天の大人を生ずる偶然にあらず、眞擧の決して増減す可らざるとを説き、云く、

アナタも定めし然るとなるべし、吾等が存する皆な天職ありと覺悟し、佛氏の所云る、一大事の因緣を以て世に出現すと心得、先覺、后覺を悟とすの義務を深く覺ゆと。

先生が謹嚴重厚の風采、今や目前に彷彿たり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

小公子。

第六回（下）　若松しづ子

さて翌日フォントルロイ殿とハ氏が乘つた馬車がドリンコート城へ行ふといふ長い並木を通りました時は正午も餘程過ぎて居りました。老侯の仰に、フォントルロイ殿を晩餐に間に合ふ樣連れて參れと有りました。又た何か特に思召が有たものと見えて、老侯が獨り待ち受けられるお居間へ付添ひ手なく、たゞひとり遣はせといふお言葉でした。馬車は彼の並木の間を轟音高く走しる中、フォントルロイ殿はユックリと立派な羽布團に寄つて、四方の氣色を餘念なく、眺めて居られましたが、見る物聞くもの面白くないものは有ませんかつた。きら／＼した馬具の附いた、立派な大馬の引く馬車にも、見事な揃を着た脊の高い御者や馬丁にも心を付られ、特に大門の扉に彫附て有た冠の摸形に眼が止りまして、どういふ理由のあるものか研究をするとて愍に馬丁と知己になりました。それから、馬車がお庭の御門の前へ來ました時、入口の兩側に有た石造の獅子をよく見ようとして、馬車窓から首を出しました。此時蔦が青々と覆ひ被せた家を出で、御門を開いた者は頬の色の好い母らしい女でしたが、二人の子供が跡に續いて駆出して來まして、丸い、大きな眼をして馬車の中の若ぎみを眺めて居りました。お袋らしい彼の女は、ホヽ笑みながら、腰を屈めました。そうして子供等も、お袋に催促されて、頭をさげて辭儀をしました。フォントルロイ殿は、

アノ女は僕を知つてるんでせうか？、知つてると思ふんでせうね。

と云つて、黒天鵞絨の帽子を脱いで、こちらからも笑ひかけました、又例のさゑた調子で、

今日は！御機嫌は如何？、

といひますと、女が嬉そうな顏つきをした樣に、セドリックには見ました。始めからホヽ笑んだ口が、いよ／＼廣く開きまして、眼元にも親切相な處が現はれて來ました。

若樣、よくお入りで御坐いました、マアお見事な若樣で入つしやいますよ！、御好運と御幸福を幾久しく祈り上ます。

と申ました。フォントルロイ殿は帽子を振て、再び會釋し升た。

終に馬車は女の側を通つて、先へ進みました。
僕はあの女がなんだか好です、子供が好の樣な顏して居すもの、僕は時々こゝへ來て、あの子供たちと遊び度もんですね、また外にも大勢子供が有りますかしら?。
ハ氏は門番の子供などと遊び朋輩になることは赦るされそうもないことゝおもひながら、あとでも申せることと、扣へてなんとも答へませんかつた。さて馬車はズン／＼進行いたしました。此馬車道の兩側に見事な大樹が生ひ繁つて居つて、双方から覆ひ、重つた大枝が、生きた綠門になつて有ましたが、セドリツクはこんな嚴めしい立派な樹木を見たとが有りませんかつた。ドリンコート城は大英國中の城廓で是に劣るといふものはなく、其庭の廣いとと見事なとに於ては、指を折れる中で、殊に樹木と並木道は他に並ぶもの丶ない位といふとを、其時セドリツクは未だ知りませんかつた。併し何も彼も美しいといふと丈は、知つて居りました。すさまじい大樹の間から、午後の光線が黃金の矛を差通ふしてゐる塩梅、四面聲なく、沈々とした趣むき、風にユウ／＼と殺いで居つた大枝の間からチラ／＼見える樹苑の景色、一々セドリツクの心を悦ばして、眼を慰ませぬものは有ませんかつた。時時は青々とした丈の高い格注が毛氈を敷詰めた樣に生へた處を眺め、又處々には微風に靡いて居つた桔梗の薄色が、空と見擬ふ計りに咲き亂れて居つた處を通りました。ある時は、青葉の下から不意に兎が跳出しました、短かい白い尾をチラりと後ろへ見せて、又何れへか走り去るのを見て、セドリツクは跳ね上つて大笑をいたしました。一度は間近くから突然に雉子の一群が、羽敲して飛び出しまして、又飛び去りました。此時セドリツクは大聲を擧げ、手を拍つて、
ハヴイシヤムさん。どふも奇麗な處ですね?、僕はこんな奇麗な處見たとがないです、アノニユーヨークの中央公園よりまだ奇麗です子。
行く途に大分暇どれたのを、少し不審におもつたと見えて、
全体門から入口までどの位あるんです?、
と問ひました。
左樣、三英里か四英里も有りませうか、
ソウデスカ自分のうちの門からそんなに離れてるツて、大變ですね、

セドリックは、ひとつ驚いて幾分も過ないに、また驚いて感服すべき新しいものに出逢ました。一度は或は青草の上に横になつたり、或は馬車音に驚かされて、奇麗な角の生へた頭を並木道の方に向けて、ビックリした顔で、立つて居る鹿を見付まして、まるで夢中でした。セドリックは聲の色を變へて、

ア、、こゝに見せ物でもあつたんですか、それともいつでもこゝに住んで居るんですか?、一躰誰のなんです?

と問われてハ氏は、

いつもこゝに居るのです、それは侯爵さま、即ちあなたのお祖父様のものです、

是から間もなくお城が見えて來ました、其眼の前に巍々として突立した處は、誠に見とに錆て居りまして、數々の窓には夕陽の光線が眩ゆく輝いて居りました。井樓もあれば、凸字壁や、砲臺も見える、其幾方の壁には、蔦桂がはひ纒ふて、古色を增して居りました。お城の四方には觀臺や柴生や美麗な草木の植付けが有つて、今を盛りと咲き亂れて居るものさへ夥しくありました。セドリックのくり〳〵した顔は、嬉しさに逆上てポット櫻色になり、

どふも僕はこんな奇麗な處見たとがないんです、王樣の御殿の樣ですね、いつか御殿の畫を畫双紙で見たとが有ましたつけ、

といひました。さて這入ろうとする玄關の扉は双方開いて有つて、召使どもは二列に居并んで、セドリックを見て居る樣でした。セドリックは何故にあの樣に并んで立つて居るのかとおもひ、揃の服の見となに感心しました。セドリックは此召使たちが、程なく、此城郭と總て是に附屬する者の主領となろうといふ此若君に敬禮を表して居たとは知ませんかつた、畵双紙の宮殿めいた此莊麗な城郭も、立派な樹苑も、嚴めしひ樣な大樹木も、兎が遊ぶ草原も、柴生を寢床に起伏した、駁色な眼の大きい鹿も、みんなお軈、セドリックの所有になるのでしたが、思て見れば、馬齢薯や鑵詰物の眞中に、ホップスおぢと腰かけて高い臺から兩足をブラ降て居たのは、ツイ二週前のとで、其時は何さら、今でも、こんな立派な物に大した關係がある樣には思れませんかつた。召使の居并んだ頭の方に、眼立ぬあから立派な姿をした老成らしい婦人が居ましたが、セドリックが這入ますと、外の者よりも間近く立て居て、何か言

ひそうな顔付に見えました。セドリックの手を引いて居つたハ氏は鳥渡足を止めました、そして聲をかけて、

メロン夫人、フオントルロイ殿で御座りますぞ。若君、取締のメロンと申す婦人で御座ります。

セドリックは眼つきに嬉しい情を現わし、握手の手を延て、

あなたでしたか、あの猫をよこして呉れたのは?、どふも有がたう、

といひますと、メロン夫人は、門番の妻の顔ほど嬉しさうな顔になつて、ハ氏に迎ひ、

いづれでお眼通りいたしても若ぎみをまちがふとは有り升まい。お顔も御様子もそつくりエロル様で御座ります。ああた、今日は誠におめで度とで御座ります。

といひましたが、セドリックは何がおめで度のかと不審に思ひました。デ、メロン夫人の顔を不思儀さうに見ますと、チヨツトの間、眼に涙が浮んで居た様でしたが、悲しそうでもあく、セドリックを見つめて、につこりいたしました、

あの猫は見とな小猫を二ツこゝへ殘して參りましたから、早速御居間へ差上げて置きませう、

といひました。それから、ハ氏は何か低い聲で二言、三言いひ升と、メロン夫人が答へて、

あなた書斎で御座ひますよ、若君をお獨で、そこへ差上る筈で御座ります。

理學

○果實中の酸類

吉田伸子

果實中にある酸類は、通常二種の有様となりて、存在するものなり。其第一は他物と化合せざるもの、即遊離酸にして、酸味甚だ強し、第二はポッタース石灰等の如き、鹽基性物と結合して鹽類となりて、存する者にして、其味大に減少す。植物中にある酸類は主に炭酸水の三元素より成り、澱粉、脂油類に比すれば水素少くして酸素多し。

諸果實中に含む所の酸類は、未だ全く精密に知ること能はずと雖も、今其概略を左に掲げん。

○林檎果中の酸

林檎果中に在る主なる酸は檎酸にして、他の果實中にも亦之

を含む、即梨桃さくらんぼ葡萄香茄梅等の諸果中に、遊離して存在す。熱せざる綠色の林檎果中には、特に多量を含み、熱するに從て、其量を減ず。又野生不良質の林檎果中には、此酸多く、培養の法宜しきを得るに從て、減量するものなり。

○檸檬果中の酸

檸檬果中に存する主なる酸は、枸櫞酸にして、他の果實にも林檎酸と供に存在す、蜜柑橙子等之なり。檸檬果の搾汁より、大なる結晶狀の枸櫞酸を製することを得るなり。

○葡萄果中の酸

葡萄果中には遊離せる酒石酸を含む、又ポッタースと化合して、酒石酸ポッタース即吐酒石となりて存在す。此酸は空氣中の濕氣を吸收すること、枸櫞酸の如く甚しからず、然れども香味は彼に及ばざること數等なり。沸騰散は重炭酸ソーダ三十分に、酒石酸二十五分を混合してなるものなり。

其他熟せざる梅子の中には、有毒なる青酸を含む、注意せざる可からず。

○砂糖

砂糖は食物に甘味を與ふる元質にして、動植物供に之を含む。動物の乳汁中には、多少之を含むと雖も、植物の如く多量あらず。植物は其果實種子或は莖皮の液汁中に、多く之を有し吾人に愛す可き美味を給す。

今砂糖を含む主なる動植物の名稱及び百分中の割合を列擧せん。

甘蔗の液汁	百分の十二、乃至十八、
ビート、ルート	百分の五、乃至九、
小麥の粉	百分の四、乃至八、
大麥の粉	百分の五、二
燕麥の粉	百分の四、八
牛乳	百分の三、三
裸麥の粉	百分の三、二
豆類	百分の二、
玉蜀黍	百分の一、五
米	百分の〇、二

子供は脂肪を消化するの力なし、故に砂糖を好む、砂糖は一變して脂肪となり、身体の發温質となる。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

曾我夜討

紫峯子

苟も詩と云はんもの韻を踏むは古來各國皆然り、我國古代の詩亦一定の韻ありき、降て古今以來古躰亂れ、亂調交も出で韻をふまずなりぬ、余が此にものせしは五七の調をもて韻をふめるなり、其可否余未だ云はず、敢て讀者の高評を待つ、我國將來の詩に於ける精密の意見は乞ふ他日を期して述べん。

其一

うばたまの　やみ夜ぞふけぬ、
遠近の　かゞり火消えぬ、
そゝぐあめ　しのをばみだし、
ふきまじる　あらしぞはげし、
一昨日も　昨日も今日も、
大み狩　いさましきかも、
つかれけん　數万のつはもの、
死せるごと　うちねふりけり、
ものさびし　ふじのすそ野
たけり猪の　なく聲ばかり、
まがはざりけり。

其二

はげましつ　はげまされつゝ、
立出づる　兄弟ふたり、
なく〳〵も　故郷にとたつ、
はらからの　郎等ふたり、
主從が　此世のなごり、
ふりてらす　松明のかげ、
近づきて　見合せにけり、
別れゆく　互みのおもかげ、
たらちめに　心はかへり、
身はのこる　曾我のはらから、
これはまた　郎等ふたり、
身はかへり　こゝろはこゝら、
さらずやあるらん。

其三

小やみなく　雨ふる夜半に、
いかなれば　松明てらし、
列卒がぬる　やかたのかたに、
近づくらん　實にもいぶかし、
幕の紋　これかあらぬか、
いづこぞと　行きつかへりつ、

たづぬるは　工藤が館か、
ふたり立つ　此處ぞと云ひつ
しづかにも　戸をおしひらき、
仇人の　枕邊さして
忍び入る　すがたぞたけき、
館のうち　殘る隈なく
仇をもとめぬ。

其四

こはいかに　めざすあだびと、
逃げぬるか　そもいづこぞと、
いふふたり　望みもたえぬ、
立いでゝ　更にもとめぬ、
人ありて　案內してけり、
そが館に　立入にけり、
仇人は　醉ひたりければ
打ねふり　前後も分かず
父のあだ　知れよと云へば
起上る　工藤祐經
兄弟は　ぬくても見せず
ふりかざす　友切、微塵　※
疾くきらめきぬ。

其五

そはあだよ　くせものなりと、
さはぎたつ　許多のつわもの、
かしかまし　假屋のうち外、
手にぞとる　かたなうちもの、
立出づる　十郎、五郎、
庭に立ち　なのり呼びけり、
めがさじと　つけ入るつはもの、
はらからに　うたれはてけり、
亂れ入る　人はつきせず、
切むすぶ　刀音やまず、
ふる雨は　そゝぐが如し、
うばたまの　くろくも厚し、
闇の夜のそら。

※友切は源氏重代の寶刀此時五郎時致の佩びしものなり微塵と云へるは木曾義仲の寶刀にして其子を賴朝に質するに當り、與へしもの、其子誅せられし後、箱根權現の別當所藏せり、仇討に當て之を十郎祐成に贈りしとなり。

化粧

蓮峰外史

巾幗社會の外にありて、近眼か遠眼か、分らぬ他眼に、八目の力をそへたる、眼鏡をかけて、よしの川よしとは、いかなるをいひ、なにはの江のあしのあしとは、いづれを分く可きぞと、いふことの、なかなかときのべがたきを、及ばぬ筆に、うつしみんとは、さりとて、大胆不敵のわざかな、色も香も、知る人ぞ知ると、たゞ一針を下されんかは、知ねども、自己は御化粧部屋の侍婢でもなし、御氣に召そうか、召まいかといふ、心配もいらぬことなれば、思ふまにまに一寸ひと筆、化粧文、めで度参らせ候かしく。それ化粧は、美術の一部分にして、その妙趣を理解し、其伎に達する時は、七九の婆様も、二八の春のかへり咲を爲し、紅顔緑髪の阿娘も、御好み次第で、白髪衰顔（當時歐米に行るゝ化粧）、老行秋のおも影をもうつし得らるべし、さりとて、これを濫用せば、トンチンカンの出たちとありて、意外の結果を、生ずるに至るものなり、こゝに、日本の化粧といふは、時様によりて、非常の變動を來たすことなく、美術に因んで、割出したといふ程の、六ケ敷こともなし、化粧は婦人のたしなみとて、ふり分髪のそのころより、敎へられたることなれば、誰に見せよとて、紅かねつけよぞと、意中の人の爲めに、粧を凝すは、或は十の一二に、過ざるべし、其他はなんでも、勝手にしろ箒木で、ペンキを塗抹ふが、價まではせる初霜の、ところまだらも、中にはあるべし、しかし派手なる化粧は、當時一般の流行と見へて、五十に近き婦人にも、毛蟲の樣なる眉毛がつき、珊瑚の球は、大丸髷の根元にかぢり付き、淺黄縮緬のしぼりはなしは、鼈甲の中挿に、てがらの樣に卷き付きたり、面によせくる年波も、さすが白粉の功能にて、其あとを留めずといへども、數ふれは秋の最中になりけらし、又年若きは、雲なす髮を、大銀杏返唐人髷にむすびたる美しさ、幸に彌二郎喜多八をして、拜見せしめなば、漆を塗りたる仁王の柏餅か、行儀よく二ツ並んだと、飛び立つ程、恐悦仕らん、或は文金の高髷に、顏も襟元もいたらぬくまなく、たゝ白妙に雪ぞふりけり、時ならぬ紅薔薇、兩唇に二たひら咲きそめたるもおかし、かゝる時樣に、眩惑たる世の中には、柳にかゝる、三日月の櫛と、なにがしが言たる、さらりと結んだ、洗髮の嶋田に、とけしすがたや、夏の富士といふ、意氣な化粧も、全く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地を拂ひたるもの丶如し、時樣は變り易きものなれば、これを以て化粧の標準とは、爲しがたし、たゞ東家の顰を學ばず、美術の觀念を以て、各自の嗜好の、有る處に注意して、香奩に向はゞ、櫻の艶、梅の淸、梨花の淡、海棠の濃、向ふところとして意の如くならざるはなし、こゝに化粧の品類を分ちて、濃抹、艶麗、淸素、淡粧といふ。

◎◎濃抹は俗に上品といひ、又野暮ともいふ、意氣の境界を、全く離れて、たゞ美麗を專らとし、最目に立つ化粧なり、試に年若き婦人に付き、うつし出せば、髮は文金の高髷、鼈甲のさしこみ、金銀づくめの花簪、或は唐人髷に、緋鹿子をかけばら金を結ひ、金銀の花かんざしにて飾る、芳紀四六にをよびたる婦人は、お初髷淺黄鹿子をかけ、蒔繪の中ざし、丸方の鼈甲の櫛を用ゆ、肉色の見へぬまで、首筋襟元面部に、白粉を濃く塗り、前額の生際は判然と、きはどる樣にすべし、唇は黄金色を帶るまで、紅をすゝぎ、齒は白く磨くべし、束髮あれば、日本風の結び方を折衷して、鬢前髮を膨脹かすへし、しかして眞珠珊瑚の細き珠を、結目にかけ、金或は銀の花簪一本、ピンハ鼈甲、蒔繪の象牙たるへし、これ海棠の新に雨を帶びたるが如くなるべし。

◎◎艶麗は人柄ともいふ、嶋田髷少し丸く、とき色の紐を結び、金の輪にて根を卷きたり、結綿と異ることなし、鼈甲金銀の簪、牡丹形の蒔繪の櫛を用ゆ、銀杏返は小さからず、丸髷は大なるへし、近日流行の前傾の丸髷は、宜しからず、根は一樂燒瑪瑙の小さき玉、珊瑚珠、厚き鼈甲の櫛、甲がいは適すべし、白粉は、花の雲と九重、唇は紅を濃くするもよろし、所謂霞に醉る櫻とは、この粧なるへし。

◎◎淸素は恰當、澁いなどいふて、艶ならず、淸ならず、よくその中庸を得たるものなり、中高の嶋田、或は少し淡き方にして、前面廣く長し、銀杏返の輪、餘り大ならず、根に小さき乾也の樂燒か眞珠あり、うしろさしは、金足七寶燒の玉釵一本、中ざしなれば金の簪一本、一寸素面を粧ふため、若櫻、花の雲よろしかるべし、黄昏の月影に咲く、梅の花の淸きが如くなるべし。

◎◎淡粧、俗に仇ぱいといふ、淡き嶋田を邪見に結び、銀の細輪にて、一寸元結をかくし、釵壹本を用ゆ、小方の丸髷、珊瑚珠を根に卷く、達磨返、櫛卷、洗ひ髮などは、最もこの粧飾

に適すべし、されど注意せざれば、或は下品に見ゆる恐あり、素面をあらはすことをよしとすれば、水白粉の外、用ゆべからず、雪の水などよかるべし、この粧を試むる人は、平素の心掛大切なり、まづ時々髪を洗ひ、ヘチマの水、或は龍腦水を常に額に塗るべし、尤もグリスリンを、浴前に塗り、化粧シヤボンにて洗ひ、然後粧を施すべし。雨を帶たる、一枝の梨花といへる、澹泊にして、多情ある粧なり。

ウェレズレー女子大學觀察畧記（二）

成瀬仁藏

躰育、 校内空氣の流通自由自在に度を節するを得、溫氣にても、冷氣にても、意の如く引入るべく、寒暖計にて一定の溫度を計り、講堂に、假令聽衆充滿するも、萬人一樣に新鮮の氣を吸ひ得るの搆造あり。食物は生理的、化合的の學理に合ひ、一の批難す可き點を視ず。其他躰操を初め、運動、洗濯、沐浴、等に止る迄、一として衛生方に適はざるはなし。然れども、本校の一大欠點と思ふものは、他にあらず、生徒の餘りに學事に偏し、體育を怠る事也。即ち其弊として批難すべきもの三あり、そも其内の二弊は、極少數にして、一般本校の風儀といふを得ざれども、其一は割合に腰の小き事なり。中には實に嘔吐を催すべき程小き者ありと見たり。是米國の習慣、遺傳等にも因する事なるが、失張り「コーセト」の爲す處ならんと察す。尤も教員等は悉く其弊を明知するが故に、之を教戒し、其多數は「コーセト」を用ゐる共、身躰發育を妨る程、之を結束するものはなき由。又其二は時々學生の中に耳環を掛たるを見るとなり。第三即ち最大の弊といふ可きものは身躰運動の足らざることゝ也。この弊は獨り女子にのみありとは謂ふ可らざれども、女子は男子の爲さゞる余計の注意を身躰の裝飾、室房の整理抔に要し、常に心を靜にして勉學に傾くる故三育の平均を失するは事實也と察せらる。是れ米國女子教育の改良す可き要點ならん乎。然れども女子高等教育は躰育に害ありとは、余決して信ずる能はず。前述の弊は、必竟平衡の宜を失し、一方に偏したるより生ずる弊害なれば、若し之を平均せしめば、智育は却て躰育を助るは論をまたず。殊に余は六十餘名の教員の躰格にも注意したるが、其多數はよく肥滿し、全部十分發育したるを見、智育が女子躰育を害するとは、實際にあらざるを感じたりき。尤も六百餘名の生徒にして其身躰發育を察するに、腰の外は多數は十分發育し、日本青年女子に比すれば、遙に勝りたるを覺ゆ。又余の滯在中病床にありし者は僅に二三名なりし。

教員の輿論、 余は多の問を發し、諸教員の經驗、所見を聞きたるが、、其中本校の輿論と云ふ可きもの〻の、一二を擧げん。女子職務の範圍、は男子の範圍と異なる處なきとの説にて、其理由とする處種々ありき。又男女混交教育、の主義を賛成し、種々の結果を擧げて、之を證せり。併し余は未だ之に一致するを得ず。

洗濯所、 余が滯在中手拭、シーツ、等は一度用ゆれば直に之を取替へて洗濯する故、余は洗濯所は何處にあり、又七百名の生徒は如何に洗濯するやと訝り居たるが、漸く最後の日に至り、洗濯方を視て其意外なるに驚き入りたり。日本の女子が足袋一足洗ふに手の皮を剝く程磨するが如迂遠なるものにあらず、蒸氣機關（此機關の作用の及ぶ處廣く冷水、溫湯、暖氣、等を各室に送る事より、其他百種の働を爲す）の一部の席にて洗濯機械（其一局處を押せば）自ら運轉して其中に滿る洗濯物を洗ひ、また他器に移せば清水にて精洗し、全く純白となる、而して之を乾すには、亦一室ありて高溫度を保ち之に入る時は、亞弗利加の熱帶地方へでも入りし感あり。故に大氣の晴雨に關らず、常に定則通に洗濯するを得可きなり、又之を熨するも、其一端を器機に狹めば、直に之を仕上げて他の一方で押出す也。

それ米國にては八百屋、紙屑買に至る迄、馬車を驅て、商賣し萬事萬端物質界の力を使用し、一人の人間が千人の仕事を爲す、大勢然らしむる所也。余は之を思ふ每に吾國の人足の憐むべきを嘆じ、一日も早く人力を馬力や、風力や、氣力、の代りに使用するを廢止し、人間が機械と物質力を使役するの地位に進まんとを願ふて止まざるなり。吾人が人力を用ゐて文明國に競爭せんとするは恰も人力車に乘て滊車と競進を試むるが如し、愚も亦甚しからずや。

池袋清風大人批（案山子の舍）

杜鵑　みさを

、、音羽山高根の月をあらはしてさしのぼる月になく杜鵑

仝　安藤たれ子

、、たづね來る人しなけれど我宿に杜鵑なく○さみだれの頃

仝　日高みつ子

、、夕月夜窓の戸あけてながむれば雲井はるかになく杜鵑

評　月前のほとゝぎす也。

水雞　前島むつ子

、螢かる里の童子の聲やみてかど田の月になく水雞かな

評　月夜には螢もよく見えざるべし、田家水雞也。

仝　みさを

、、月匂ふ野邊に水雞のなく方や我澤みづの行へなるらん

評　澤とは人里にあるものにあらず。

夏月　竹内うめ子

、、粟田山木の間もれ出る月影のうつるも涼し加茂川の水

螢　高原うめ子

、ねになかぬ思ひぞいとゞ草深き闇路をもえてとぶ螢哉

評　水上の螢なり。

隨感

言を愼め　カオす子

才ある者は言によりて行はんとを欲し、直き者は行によりて言はんとを欲す。言によりて行はんとを欲せば小人の奸出で、行によりて言んとを欲せば君子の德現はる。されど、才ある者奸に陷ると同に、直き者往々にして言に失す。直き者往々にして言に失するは、言行を輕んずるが爲めにあらず、實に言行を輕重して均しく重んぜざるが故也。蓋し言とは口上の行なり、行とは擧動上の言なり、共に言、共に行にして、決して偏すべきにあらざる也。されば、君子の言ありと雖ども行のこれに合ふなくんば不可なり、而かもまた、君子の行ありと雖ども言のこれに隨ふなくんば猶未だ可なるを知らざる也。クリスト宣給く、之れ爾その日ところの言に由て義とせられ又其のいふ言に由て罪ありとせらるゝ也と。言を輕んずる者は行を輕んずるなり、行を重んずる者よ須らく言を重んずべき也。

しのぶ評。行は心の文、言は行の華、偏重偏輕すべきにあらず、其一を朴にするも必しも直ならず、要、一致にあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

紫海の嵐

第八回

さみだ

宮中の人々よろこびけるは親虎の心かはりし由、手紙もて云ひ送れるが故なり、騎士の傳へし所を聞き、親虎はいといぶかしと思ひしが急ぎて云へる樣子、詐りとも思はれず、問ひ合せ、事の實否を知らんには時なし、急に手紙を認めしなり、而して後カブラル大師に就て問へば一人の騎士の來れる事なし、そが云へるは詐りとこそ知られ、陽に敎を捨つるはよからず、昔救主が刑罰に遇ひ給ひしより以來、或は火の上に立ち、一筋の煙となりて失せ、或は劍の下にもろき露と消え、道の爲めに身を致せし人少なからず、其他子は親に迫められ、妻は良人に惱まされ、朋友相爭ひ、親戚相分るゝに至りしもの限りあらず、彼等若し口に救主を知らずと云へば斯る惱みはなかるべかりしに只心づよく主を捨てざりし故身の上に一方ならぬ苦惱を受けぬ、されど是肉に於ての苦惱のみ、彼等の靈は如何に幸あるらん、今の世もまた後の世にも限りなく朽ちぬ榮えに與るらん、こを誠の聖徒とこそ云ふべけれ、心竊かに信ずれば可なりとせず、一夜鷄鳴聞えざるに先だち、三度主を知らずと云ひけるは主のいたく咎め給ひし處ならずや、君今如何なる禍の迫り來るもペテロの犯せし罪を繰り返す勿れ、前の人の倒るゝは後の戒めとこそ聞き侍れ、心すべきことにこそ云々と答へぬ。

コハ詐られしか、口惜しや、我罪重し、如何に神に謝せん、亦日頃の大師が御敎訓にも背きつゝ我の過ち如何にして詫びんと、思ひは亂れ、心もこゝろならず、親虎周章ふためきてありけるが斯てあるべくもあらねば直ちに硯引よせ墨すり流し、いそぎ認むる水莖のあと、封ずるも手早に侍從ふ武士呼びよせ、急ぎ父の許へ、と云ふより早く使は宮中をさしてぞ走行きける、親虎あとに涙ながらに祈りけり。

義親公一人の武士を呼び、疾く讀み上げよと云ふ、

急ぎ父上に申上べき事こそ候へ、拙者未だ年若く聖敎の深意も悟り候はず、先きに使者もて申上げつる事いと神の御敎に背くことゝ覺え候、たとへ身は父上に捨てられ、野の末、山の奥にさすらひ候とも更らに悲しとは思はず、只拙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

者は何時までも聖教を奉ずるもの丶、一人なるを得ば外に望む處は候はず。

聞き終つて義親大ひに愕き、一度心を變へしかと思ふ間もなく、また斯く云はんとは心惡き事の限りあり、是といふも畢竟フロエー教師カブラル大師等を始めとして許多の聖徒が親虎の心を誘ひ導びき、斯くはなしつるなり、イデヤ是より聖徒のもの共殘らず殺害し、根を切りて枝葉を枯らすの策をめぐらさばや、もの共來れと下知すれば許多の武士宮の下にと集りけり。

義親臣下を集めて評議區々なる中に一人の武士走せ來り、こは大村國主(肥後國主と同じ)の次子親家公より若君に送り給ひし書簡とぞ覺ゆる、只今使者に出て遇ひければ拙者預かりて若君に渡すべしと云ひて使者を返しぬ、只今若君に渡して宜しきや何如に、此處にと義親とりて封押開き、一讀するに愈信仰の心を固くなし、生くるも死ぬるも、飢ゆるも苦しむも只救主の命に任ずべしとの意をもて細精と書きつらね、終りに親しき交情を述べぬ。義親一讀して大ひに怒り、手紙を切々に引き割き、一人の侍を呼び近づけ、早馬にて使を大村城に差立てよと命ず。

＊　＊　＊　＊　＊

峯高く谷深し、人の行きゝは絶えてなし、潜む龍に非んば猛き獸の住所なる深山の奥名にし負ふ九國第一の高山阿蘇にも程近きあたり、日々獵の聲すなり、幾多の人の集るにや、時に或は吶喊の聲天地にひゞき、山も裂け巖も崩るゝばかりなり、或時は鼓の音、矢玉のひゞき心も消え、耳も聾する程なり、獵人とて山にあざり、谷を狩し、露に臥し、風に起き、世の活計をたつる人ありと聞く、されど斯ばかり多く集ることやはある、よの常の獵人ならましかば五人十人集ふことこそあらめ、いかなれば斯くは許多の人打ち集ふらん、世に恐ろしき天宮とやらんものなるべし、近づかぬこそ危うからざらめと、遠き里、遙けき町に住む人は恐れおのゝきけるも多しとかや。

今朝未明に大村城を立出で、早馬に鞭を加へ、急ぎける程にはや深山近くまで來つる一人の武士、何處をさして分け入るべきかと思ひめぐらす折こそあれ、薪負る賤の男、木かげより出で來にけり、それと見るより武士聲かけ、ヤヨ山賤待

て暫し、此山中に分入りて日々獵りくらす人なきや。山賊は後ろに見向き、何處までとも限りなき深山の內、誰が分け入りしか知り侍らず、是より西にわたりて折ふし高き聲、矢玉のひゞき聞ゆるは知れり、外には知ることなしと答へけり。武士はサラバと云ひて一鞭あて、西の方にと駒を走す、はや日も西に傾きぬ、暮れぬ程にと急ぎ行く。

偖も豐後の國主大友義鎭は數十年の昔より聖教の善を知り、自ら信徒と名のりこそせね、其實信徒と異ならず、されば佛徒の不德姦惡なるを惡み、聖徒の行ひ正しく心ざま清きを愛で給ひ、聖教を傳ふる異國人を厚く待遇し、聖徒に保護を加へけり、されば聖教いよ〳〵傳はり、信徒日々に數を加ふ、民よろこび、國治り、天晴なる明主と崇めぬ人こそなかりけれ今ははや六十歲に近くなりぬれば位を長子義統に讓り、身は靜かなる所に退き、老後の樂しみをぞつくしける、年々冬の頃となればあまたの人を引つれ、山邊に狩りして樂しむを例とす、今年もまた打出でゝ獵くらすも、はや一月あまり、日々奥山のさはがしきは義鎭が其臣下なる武士を引つれて、狩り遊ぶなりとは知られけり。

人聲と矢玉の音をしるべにて危き山路に馬を走せ、尋ね入りしは誰ならん、遠近の木の間に散りゐる武士に近づき、殿は何處に渡らせ給ふぞ、急ぎ註進すべき事あり、遙々大村より奥方の使者として訪ひ來りぬ、疾く遇はまし、遇せ給へと呼びつゝ、猶も獵場にかけ入りぬ。

マイルス、スタンヂッシユの戀

前號第五回の下の末段、左の一節を殘しぬ。第六回は次號に載す。愛山生に止みがたき事のあれば也。

寂然として彼等は去帆を打まもりぬ、彼等も亦生とし活る人類なれば如何で彼の船を戀ふることのなからめやは時にプリマウスの尊き長老は靈にみたされたる如く預言者の見たりしと云ふ異徵につゝまれたるが如く其白頭をば露はしていざ祈るべしと云ければ彼等は皆祈禱して神に感謝をさゝげつゝ勇氣をば挽回しぬ、波は岩の根に哀し氣にむせぶなり、其上なる死人を葬る丘陵の上に生へる麥はうつぶして何事かさゝやくなり、暮に眠れる人々は其眠をばさましつゝ彼等と共に祈らんとて出來ぬべくぞ思ほゆる、海の東の穹窿に日光をてりかへし白く輝けるは是今出行きし船の帆なりけり其色墓所の大

理石に似たり其下にこそ逃遁の望は總て葬られける、彼等が其所を去らんとするとき只見れば一個の印度人あり岡上より此方をうかゞい居たり。人々が手を擧げ「看よ〳〵」と言ひけるとき其姿は失せぬ人々やがて散じ去りしかどもアルデンのみ暫らく海岸にさまよひて岩がねわらふ波のさま、神の靈の如くに水の上に動くなる日の光をながめ居たり。

批評

○春日局

撫象子

櫻癡居士が新作にして、古河默阿彌氏校正し、市川團十郎氏興行權を所有す。三代將軍のお守役、稻葉佐渡の守が妻、お福の前を主とし、家康を重客とし、關東大阪の交捗を絲として、巧みに、戀愛、忠節、貞操、義氣の人情を書現わしたり。序幕の二、閑居坐敷の段、卷を壓す。終末、御白書院の大團圓に照應して、賢婦、好妻が美徳を發揚し、ほと〳〵殘す所ろなし。學海居士が作に比ぶれば、濃淡の差申す迄もなけれど、兎角、姦邪獰惡を寫す所ろ、極めてあはくしく、左しもの謀計を爲しける者の所爲とは見へず。隨がひて局の器量家康が明識を發表するに物足らぬ心地ぞする。第二幕御花見の場、老女、用人密談の條を、本文の冒頭に置きたるを演劇には改めて后にしたるよし、之れ當然の趣構なるが、本文中他に尙ほかゝる欠典ありて、初めより惡人を惡人らしく現わし、子供が泥棒のたくらみを爲すかの如く、陰謀何如にも露顯し易し、隨がひて見るもの讀むものに氣を揉ますとの淺くゝしきぞ、殘念なる。左れど、心得ある夫婦の間柄を何如にも高潔に持成さしめ、威風儼然、禮儀粛然たる間だに、無限の情を含ませたる所ろ、今時のなよ〳〵小說家に比べては、さすが抜群の手腕と謂つべし。讀てすら斯の如し、其劇の演せらるゝを見るもの、感定めし一層ならん。

○蓬萊曲

雲峯生

一紳士琵琶を携へて蓬萊の野に逍遙す、空中より聲あり、早く世を解脫して仙境に入れと呼び、亦忽ち止む、紳士頻りに世を厭ふ、或時空中に唱歌の聲す、紳士琵琶を彈て之に合す、之より露姬降つて紳士と交はり、且つ導きて蓬萊山に登る、山頂に魔王あらはれ、魔法もて紳士を殺す、之に依て紳士世を去り、別篇に於ては全く仙境に入れる所を述ぶ。一篇の趣向略ぼ斯の如し、精細に至つては此に云ひ難し、若本篇に偶

意あらんかとて、此に趣向を述べて讀者に告ぐ。蓋し仙境、地獄、仙人、鬼、魔等の事を記するに至つては其正面の意を論評する能はざればなり。

歌か、余知らず、詩か、余知らず、劇曲か、余知らず、作者序して云ふ「蓬萊曲は劇曲の躰を爲すと雖ども敢て舞臺に曲（擧り）げられんとの意思あるにあらず」と、余も亦本篇が劇曲の躰を備へざるを知る、されぱとて定調なければ韻文とも云ひ難し勿論通常の散文にはあらず、てにをはの間違ひは甚だ多し、漢語の音にて可なるべき所に强て和語もて假名をつけ和語にて事足るべき所に强て漢語を用ひ、加ふるに漢和兩語穩かならぬ用法多し、余は本篇が如何なるものにて何の目的あつて作られしかを明かにする能はず。卑俗猥褻の嫌なく文字意匠共に淸潔なる所本篇の長所といふべし。

○今辨慶　天知子

少年文學第三として今辨慶出版す、著者江見水蔭氏は硯友社內厭味氣なき一の奇風子なる事を聽き居りぬ、果せるかな今此冊紙を見るに至る。表紙の鐔に種濟流の辨慶、口繪の錨に辨慶蟹、半摸糊の辨慶縞に紅葉の鬼若の句など、中々にアドケなくて趣向面白し。然れども本文を一讀し下せば唯大力量者の放快談を無味淡白に敍し去りしのみ、時に花和尙魯達と成り、時に岩見重太郎と成り、時に小人國のガリヷアと成り、時に武者修業者の陳話と成り、時に犬田小文吾と成り、時に浪子燕靑と成る。談柄甚だ陳套にして明治童子も亦興なきやの嘆あり。然れど寓言的の筆鋒として見る時は水蔭の氣概自から其間に散見するを見る。今辨慶の性質は單に力瘤の冷男子として見る可らず「今の有樣を見渡すに文弱に流れて…………これに伴ふて榮ゆるは不義不德不忠不孝、如何に嘆ずべき至りならずや此奴原は兩の眼明かに開きながら長き惡夢を見つゝ、いゝ、いゝ、あるなり」又「人の譏を恐るゝは身の自慢の裏なりけり……唯一念は我力の此物上るに足らざるか」又「世の浮薄なる風を拂ひ神國の民に愧ぢぬ樣、惰弱の眠りを覺さん爲め」又「決死一國の義勇兵…………日本神洲の快男子我が擧を贊して來れ來れ、共に御國の爲めに盡さん」等の句、以て少年の勇力好に吹込むに足るの性質見ゆ。而して修飾文字の如き優なるもの往々散見して、短句の妙なるもの、語勢の流暢なるもの、以て著者の伎倆現はるゝを見る。編中總て是れ淡々たる一片方外の力談にして開笑無邪氣の筆なり。正に是れ市川流の「暫く」てふ歌舞伎を觀るの感あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

閑書

明治の青年に眞英雄を紹介す

川合信水

此愛々たる日本の天地、何ぞ雲を捲き、雨を起し、腐敗の空氣を一掃するの蛟龍を生ぜざる、風流の才子、文弱の男兒、偏僻の壯士、僞善の論者、滔々として到る處にあり、天命を信じ、人事を盡し、至誠、熱涙、斃れて止むの猛志、雄圖を抱く英雄らしき人物に至りては、余輩其寥々晨星の如きを見るあり、青年よ、爾は眠れるか、何ぞ其聲を聽くとの少なき、青年よ、爾は狂せるか、何ぞ其響鈸の如き慷慨をなし、嗚銅の如き怒罵をなすもの丶多き、來れ愛友よ、爾誤てり、請ふ嚴然靜肅、心を平らかにして、爾の眼光を裏面の世界に注げ、今は徒らに優遊逸樂するの時にあらず、今は空しく悲憤慷慨するの日にあらず、正に是れ徐に急ぎて爲すべきの時なり、神色自若、善後の策を行ふの日なり、即ち爾は眞英雄の精神を持たざるべからず。

活氣を失はざる田舍の青年よ、聽け、余輩が嘗て田舍の英雄を評せし言を、曰く、彼の英雄は、或は母を扶けて嬰兒を抱くともあらん、或は自ら飯を煮、菜を料理するともあらん、或は畑に鍬をとり、或は親の爲めに按摩し、或は燈の下に書を讀む、彼のロビンソン、クルーソーの如く、二十四孝の人物の如く、其生活は誠に風變りならん、されど一片高尚なる、潔白なる、雄麗なる心事は、中天に聳立する芙蓉峰の如くありと。

大功を好み大名を轟かさんと欲する朝野の政治家よ、聽け、余輩が嘗て政治世界の英雄を論ぜし語を、曰く、彼れの大なる所以のものは何ぞや、唯々心中動かすべからざるの確信あるが故のみ、彼れ自らを信ず、彼れ自ら爲す所の眞理あるを信ず、故に名譽も、利益も、將た自己の生命も、之が爲めには惜む所なし、其凛々たる氣象は、アルプス山頭の積雪の如し、日光と雖も溶かす能はざるなり、皚々として人目を射る、其烈々たる精神は、エトナ山頂の噴火の如し、雨雪と雖も消すと能はざるなり、炎々として水天を照らす、之を望めば、唯だ高、唯だ壯、唯だ雄、唯だ烈、吾人をして覺へず鼓舞頓倒せしむと。

蓋し彼の眞英雄は神の前に於て謙遜なり、柔順なり、故に世に對して自重なり、自尊なり、彼れ慈眼を有し、彼れ愛腸を有す、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

麗、花の如く、淸、月の如し、疾如風、徐如林、不動如山、侵掠如火、萬般の境遇に當て、自然に靈變す、笑ふ時は兒女親しみ遊び、怒る時は惡鬼も慴伏す、量廣しくて宇宙を包藏し、注意細かにして小事に忠なり、三軍を叱咤するの氣、子女をいたわり泣くの涙、彼れ共に之を持つ、余輩筆及ばずして、未だよく之を寫す能はざるを歎ず。

嗚呼愛すべき哉、慕はしき哉、眞正の英雄よ、余輩は基督を愛するが故に英雄を愛せずと云はず、余輩は深く基督を愛するが故に、深く英雄を愛すといふ、即ち余輩は英雄の肉、形、功、名を愛するにあらず、英雄の中に在て赫々たる神の光、基督の像を愛するなり、世人徒らに英雄を愛すといふ、而して英雄の何故に英雄たるやを究めず、漠然として空しく其影を追ふ、既に影なり、如何に追ふも捉る能はず、彼此する間に、己れはいつか一種の癖人物となり了る、悲むべき哉、寄語す、幾多の青年よ、若し眞正の英雄たらんと欲せば、宜しく神を信じ、基督を信じ、爾の身をして確信の磐上に立たしめよ、嗚呼諸帝の帝、諸王の王、諸主の主、諸英雄の上に遙かに高く大なる者は基督なり、之を信ぜず、之を愛せずして焉くんぞ眞正の英雄たるを得ん、現時の英雄崇拜者が、多くは偏僻、放大、傲慢、虚喝、無禮、不義の徒となる、皆其空影を追ひたるの結果のみ、嗚呼是れ豈彼等の爲めに悲むべきのみならんや。

時事

○時勢切迫

時勢いよ／＼切迫す、大ひに志ざしあるものは大ひに養ふべし、今や局促として小刀細工に日を消するの時にあらず。

○停止、中止

發行停止、中止解散。久しく聞かざりし冷々文字、近ごろ頻りに世に行わる。衝突か、最后か、短氣か、用心か。空行く雲の足いよ／＼急あり、大水の流れの音ます／＼高し。

○實語敎

師に會と雖ども學ばざれば徒づらに市人に問ふが如し、習ひ讀むと雖ども復せざれば唯隣の寶を計るが如しと。幼なくして久しく之を聞けど、未だ之を行ふを得ず。今日の說敎と講談と、演說と、民權論も亦之に均し。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○浮説百出

善話門を出でざるに、醜聞千里を走り、人は骨と共に功績を埋沒し、千歳に惡名を遺す、世は未だ進化せず、人たゞ欠所あれかしと祈る。日となく夜となく聞く所ろの風評は何んぞ夫れ如此く醜惡の種に充ちたるや。必竟是れ人の相ひ信ぜざるが故なり、安くんぞ世皆な如此き者のみならん。

○第二期の議會

保守黨の掛引はわれ未だ之を聞かず、自由改進の面々が活氣何んぞ熾んなる、而して沈々聲なくさて非常の潜勢力を蓄なひつゝあるは大成會派、及び政府内の改革派是れなり。吾人は、義に違はざる激戰堂々公開するの日を、佇してまつ。

○殖産殖民

元の農務局長は今の總理大臣たり、元の山林局長は今の内務大臣たり、元の殖民大臣は今の外務大臣たり。今日の明治政府は實に殖産殖民の一黨徒を以て充滿すと云つべし。然れども、必らずしも海外及び北海道にのみ移住するとて專一とする勿れ、府隣總房の間にも未墾の地あり。必らずしも新に産を殖やすとも祈る勿れ、所々の山悉とく禿頭たり。

○基督教徒に告ぐ

國會紙上數度び、基督教を論ずるの文を讀む、着眼やゝ當り、要緊を得る所多し。教内の人一讀三省して可なり。

○女學校長

初回の女子師範學校長、私立最始の女學校男校長、中村正直先生永逝せり。吾人が追悼の意見、細かに社説欄内にあり。

○東京人士

三日月の小説は讀者に愛讀せらるれど、江戸子の氣象を煥發したる大家、今や世表に滅盡せんとす。榎本大臣の新任を祝す、願はくは俠骨を振ひ興せ。

○不景氣

不景氣は一種の警戒なり、もし之なくんば人は突然餓死するに至らん。追年の不景氣は、天の與ふる大警戒として邦人堅く華美輕率をつゝしむべし。今や一轉來復に向ふ、特に當に用心し、永く之を紀念すべき也。

○六百五十一万圓

樣々の遣ひ途を申出るものあり、夫々の專門に僻し、未だ完しと云ふ可らず。吾人は惟ふに、之を帝室費に奉獻すべしと。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

日本人民今后國政を代議し、天下の經濟に喙を容る、たとひ帝室費は增減す可らざるの制規ありと雖ども、亦是れ其の議定する豫算表中の一項目たり。臣民分外の處置と云ふべし。故に今に於て先づ此金を奉献し、些さか聖恩に酬ゆるの微志を表すべき也。

○今の國家經濟

年々の歳出歳入は實際何程なりや、輸出輸入も亦何程ありや、確と分りがたし。先々統計表によりて大躰を知るのみ。而して統計表に都合よく現はれ來る所ろすら、日本の國家經濟は日に日に民の骨を削るの象を呈す。あゝ今后果して何如に成行べき乎。

○商業世界

而して商業世界の不信用は一に何んぞ此に至る、慨歎に堪へず。倒れたるもの既に多し、倒れんとするもの更に多し、漸やくにして彌縫するものに至ては比々皆是なり。弊源到底一理由ありて存す。他なし、今の商業は多く無理より成る是なり、需要ありて供給するにあらざると是れ也。安くんぞ遂に倒れざるを得ん。

問答

●狂哉君、一閑生君、風月君ニ答フ。　お尋れの小説家の實名殘らず解りません、アンマリ遲れますから、解つた丈お答へ申して置ます。春のやおぼろ(坪内雄藏氏)、嵯峨のやおむろ、北邙散士(矢崎鎮四郎氏)、二葉亭四迷(長谷川辰之助氏)、三昧道人(宮崎障藏氏)、露伴子(幸田成行氏)、鷗外漁史(森林太郎氏)、美妙齋主人(山田武太郎氏)、學海居士(依田百川氏)、龍溪居士(矢野文雄氏)、青萍居士(末松謙澄氏)、思軒居士(森田文藏氏)、櫻痴居士(福地源一郎氏)、饗庭篁村(饗庭與三郎氏)、南翠外史(須藤光暉氏)、紅葉山人(尾崎德太郎氏)、忍月居士(石橋友吉氏)、思案外史(石橋助三郎氏)、香雪山人(前田健次郎氏)、鉄膓居士(末廣重恭氏)、涙香小史(黒岩周六氏)、幸堂得知(鈴木利兵衞氏)、探菊散人(條野傳平氏)、梅花道人(中西幹男氏)、漣山人(巖谷季雄氏)、天囚居士(西村時彦氏)、仰天子(武田頴氏)、南新二氏(谷村要助氏)、半痴居士(宇田川文海氏)、正直正太夫(齋藤賢氏)、眉山人(川上亮氏)、愛溪逸史(木内伊之助氏)、半牧居士(岡野武平氏)、柳浪子(廣津直人氏)、霞亭主人(渡邊勝氏)、魁雷子(古川精一氏)、三品蘭溪(三品長三郎氏)、曙女史(故人木村榮子氏)、花圃女史(田邊龍子氏)、秋月女史(大嶋ちよ子氏)、竹柏園女史(佐々木みつ子氏)。

女報

可愛子編

●香港太守の謁見　此程來航の香港太守サー、ウ井リヤム、デー、ウヲチー氏は傳令使カピテイン、ミルトー氏を隨へ、英國公使フレザー氏と仝伴にて、去五日午前十時參内謁見被仰付、又同氏夫妻及傳令使は、公使夫妻と共に、皇后陛下へも謁見仰付けられたりと。

●皇族妃旅行　小松宮彰仁親王殿下、妃賴子殿下と靜岡愛知兩縣へ旅行として、去る四日出發せられたり。

●皇族假服　故三品博經親王妃郁子殿下は、本月三日華族子爵松平喜德氏卒去に付き、叔舅の御續を以て定式の假服を受けさせらる。

●中村敬宇先生の叙勳　非職元元老院議官、兼女子高等師範學校長文學博士中村正直(敬宇)氏は、六月五日特旨を以て正四位に陞叙せられ、尚勳三等に叙せられたり。

●中村敬宇先生の逝去　先生久しく中風の爲めに惱む、六月七日午後二時五分終に長逝せらる、吾人が哀惜何ぞ堪ん。

●中村敬宇先生と教育社會　中村敬宇先生が這般逝去したるに依り、帝國大學東京學士會院會員、其他の學校より哀悼の詞を贈る由なるが、就中高等女子師範學

校は其良校長を失ひしを哀痛し、先生の葬送當日には同校一同會葬するは勿論他に何か靈前に供せんとて、同校教授の諸氏は昨日文部省に出頭して、辻次官永井秘書官の諸氏と之れが協議を爲したり。

●貴族院の悼詞　勅撰議員たる中村先生の逝去に付き、貴族院議長より悼詞を贈れり。

●女子高等師範學校長心得には　女子高等師範學校教授たりし村岡範爲馳氏命せられたり。

●華族女學生の慈善　先頃華族女學校高等科の學生數十名は、本所長岡町なる東京市育兒院に赴き、麵包其他の菓子を澤山に餽りたれば、頑是なき數百の子供一同、瓜生岩子が命に從ひて、女學生に向て默禮したる、其不憫さに皆々憐れを催し、ハンカチーフを絞りて引取られたる由なるが、同校の有志者は何程なりか醵集して毎月育兒に物を送らんとて協議中なりと聞く。

●明治女學校々資義捐音樂會　前號及び本號の女學雜誌廣告欄にある如く、同音樂會は來る二十日帝國ホテルに開會するといふ、百年の謀は人を種るにあり、日本を愛する者、同胞を愛する者、此際奮て之に赴け、切符は我社に於て之を賣る。

●明治女學校の薙刀術及柔術　同校に於ては、女生徒よく薙刀術に熟し、中にも二三の女子は精妙驚くばかりに上達したり、又此頃は兼て柔術をも勉強する者多し。

●女子學院の薙刀術　同院にても亦薙刀術講習の企あり、小松崎こと女を教師とせんとす。

●慈善演藝會　福田會育兒院へ慈惠金寄贈の目的にて、去る七、八の兩日、日本橋區蠣殼町の友樂館に慈善演藝會を催せり。

●女學雜誌の略史　讀賣新聞の新聞歷史記述者は、近日女學雜誌類の歷史を一まとめにして、編述せんとす。

●東本願寺法主の上京　法主大谷光瑩師、同夫人は、上京せり、着の日新橋停車場迄出迎はれし信徒は數百名にして、中々雜沓にてありたり

●北海孤兒院　の募集金の爲め林竹太郞氏上京せられたり、右募集金既約の分は本號廣告の如し。

●菓子中の「サッカリン」　近頃府下の菓子屋中には砂糖の代りに「サッカリン」を用ふる家あり、此の「サッカリン」は衛生上無害なるや否やは試驗の上ならでは判然せざれど、歐洲各國中には之を食類に用ふるを禁じたる處もあれば、我邦にても之を用ひざるやうにする方安全なるべしとて、心ある衛生家は竊かに眉を顰め居るとぞ。

●僧侶の激昂　前日來本誌上に、天台宗の僧侶が竊に本邦の婦人を米國に誘ひ醜業を賣らんとする者ある由を記載せしが、此の不德義の僧侶は府下屈指の寺院の者にて、何橋(五十余年)の所業なる事を發見せしに付き、各宗有志の僧侶は大に憤り、此儘打棄て置かば宗敎上に大關係ある汚辱なりとて、速に是非を糺問し、果して事實なれば早速僧侶社會より放逐する筈なりと云。

●橫濱婦人慈善會　橫濱婦人慈善會が豫て貧民病院の設立を計畫せし由は曾て記載せしが、右費用の一斑を補助せん爲め、去る六日午后三時より山下公園に同會を開き、會員自製の諸品を陳列販賣したり、生憎に雷雨の爲め、其結果を見ざりしかば、八日に又第二回を開かんとの相談ありしと聞きしが、如何せしや。

●江州婦人慈善會の救助　江洲犬上郡高宮村の婦人慈善會は、去月二十四日火災に罹りたる同郡河瀨村大字廣野の新平民三十戶へ白米七俵を給與したるよし。

●全村擧て禁酒す　江州野洲郡兵主村字五條村にては、此程全村の協議にて、本年より全村の協議にて、自家用料酒の釀造を止め、又他より酒類を買ひ入るゝ事を一切嚴禁せりと。

●京都師範學校設立紀念會　は六月二日に開かれたり、同校は設立以來漸次に改良を加へ、今日にては全國にて五指の中に入るに至れりと、同日女生徒は、タスキがけにて來會者に茶菓を供したりといふ。

●又同校の寄宿舍　は清潔にして衛生上の注意行屆き、且紀律正しと云ふ。

●私立三重女學校　は教科を普通科、講習科、手藝科の三種に分ち、三年にして卒業するといふ、校長は成田鋼太郞氏、教員は中矢四郞、三井よれ子、澤田元三郞、山田郁之丞、太田櫻雲、今西もん子、鈴木さく子七氏なり。

●英語科の廢止　山梨縣師範學校附屬の小學校にては、女子高等小學校の英語を廢し、此時間を以て理科、家政(育兒法)裁縫讀方算術の四科に配當せりと云ふ。

●靜岡市尋常小學校　にては貧困にして校業料を納め難きものには給與(全額若く半額)をなすことゝなりぬ、給與金は同市教育篤志家の寄附金より支出するものなりと云ふ。

●靜岡の廢娼會　靜岡市寺町に今度廢娼會設立し、大に運動をなす計畫にて、雜誌をも發行するの運びなりと、義人の聲日に多きは吾等の深く喜ぶ所也。

●富山婦人矯風會　は北陸富山市基督教信者の設立に係り、目下同會員は三十餘名なりといふ。

●高知縣下教育の現狀　本年三月末の調査によるに、高知縣下高等尋常簡易小學校分教場巡廻授業場の總數は六百三十八校にして、訓導は男五百五十九名、女二十八名、授業生男二百四十七名、女四十五名にして、訓導給料は平均六圓五十一錢にして、授業生は金三圓七十六錢なり、又教員の資格あるも教師に從事せざるもの、男三百四十餘人、女八十七人なりと云ふ。

●福岡縣下の女子　は概して押繪刺繡等の手藝を好み、之を以て己れの慰みとなすものあり、又は生計の一助となすものあり、思ふに此概風にして適當に進步せば、完美なる女子職業の同縣下に起るは、期して待つべきか。

●福岡縣女子師範學校　にては今回卒業したるもの十六名、全校の卒業生を出す、實に本年を以て始めとす、而して今生徒の募集に着手せり。

●英和女學校　福岡縣下の同校は、美以美教會の監督に係るものにして、現今の在學生七十余名、頗る將來に望みあり。

●福岡婦人協會　設立の當時は會員百餘名に達し、甚だ盛んなりしが、漸次衰運に向ひ、何時となし立消への姿となりぬ、近頃二三の有志婦人大に之を患ひ、東西奔走して頻りに挽回策を講ぜり、多分成就する事なるべし。

(以上四件、小林砂子報)

再開業　下谷東黒門町　荻野ぎん子

轉居　牛込區若宮町三十九番地　磯貝由太郎

●渡邊常子　は六月十一日、米國カルトン大學の理學科卒業、遠からぬ内歸朝し、女子教育に力を盡さるゝ覺悟なりといふ。

●露太子殿下金圓を貧民夜學校に寄附せらる　露國皇太子殿下の長崎御滯在中、深く術美品の精巧なるを感賞せられ、同市々立磨屋町夜學校の實況を聞し召され、同校の赤貧兒童にして學問修學の暇なきものを教育し、兒童も亦學問の疲勞を忍び孜々寸陰を惜むが如きを嘆賞せられ、同校に右金圓を下賜し給ひ、間接に美術品製造業の發達を補助せんとの思召なりしも、侍從よりの御忠言に由り、一度は御中止遊ばされしが、此頃侍從の人々に金一千圓を前記夜學校に寄附すべき旨御沙汰被遊、去廿七日電信爲替を以て長崎駐在露國領事ウオラント氏の許へ右金圓を贈られたりといふ、同市民一同は大に殿下御仁慈の御心の厚き賤の子弟を迄で憐み給ふを感じ、右金圓を國立銀行に預くるか、或は公債證書を買入れ其利子を以て夜學校の費用に充て、永遠に殿下御來遊の紀念となさんと計畫せる由。

●露國皇太子の結婚　倫敦タイムスの在維也納通信者より報ずる所に據れば、露國皇太子ニコラス親王と、モンテネグロ國王ニコラス一世の第四女ヘレン姫との間に、結婚の約束整ひたりと云へり。

●支那南京メソヂスト教會の女學校　は五月二十五日、一揆の爲めに放火掠略せられたり。

●セルヴイヤ國の首府ベルグレドにては　前女王を國外に放逐せんとて一場の騷動を起したり、種々押着の末、女王は滊車にて退去せられたり、而して其原因は、女王が露國黨を結ぶ云々の評判より起れりと。

●アッケルマン孃　婦人禁酒會書記として世界中の傳道地を周遊せしアッケルマン孃は去月頃尙ニウ、サウス、ウエールス邊にて働かれぬ、尙復活祭をシッドニー島にてなし、それよりメルボーンに達し、植民者の會合か開く筈なりしと。

●世界基督教徒婦人禁酒會　同會にては四年前より同志者の連印を求め、世界各國の政府に向つて酒類の賣買を許す事につき建議する所あらんとし、其調印も將に終らんとすといふ、調印濟みの後は之を先づボストンなる世界禁酒會に提出し、此會にして若建議の事を婦人に委ぬれば直ちに婦人禁酒會の方にて全世界の各政府に建議する所あらんとすと、美擧といふべし。

●コブデン孃　故リッチヤード、コブデンの令孃は過般ロンドン市會議員に撰擧せられしが其後には被撰擧人の資格なくして撰ばれしものなれば不都合なりとて六百弗の罰金に處せられ、孃は之を不當とし、高等法院に上告せし所六百圓の罰金を十二圓に減ぜらる、孃は尙不當となし之を上院に訟ふるといふ、孃の如く人民多數が撰出せしものを許可せざるは不可なり。

●乳母會　英國ハノーヴアーに於て過般開きたる乳母會は臨時に開きたるものなり、會長はクリスチヤン孃にしてフエンウヰク氏開會の主意を述べ、それより本會が今般の運動につき議する所ありと、即ち此會に於て是迄は單に人々の集合すといふのみにて未だ會社と云ふ能はず、此儘にては先きにブルームフヰールド女史の遺産四千磅も使用する能はざれば是非此所にて會社となさんとて其筋の認可を得るため願ひ出でし所商業に關係あるものに非れば會社として許可せず、商業的の會をなせばクリスチヤン孃は會長たるの職を辭すといふ、如何にすべきかと議せんとて此會議を開きたるなりと、終りにブラウン氏の發議にて千八百六十七年の會社條例にて會社となすも不可なしと議決せり。

●英米勞働婦女の相違　米國に於ては婦人の勞働者は大低男子より賃銀劣り、且つ勞働するの力も少なしと公聽せらる、婦人基督教會々頭すら女子は不シダラにして且つ精密なるべき仕事をわが氣儘の想像もてなす云々と云へり、然るに英國にて人を使雇するものに最も經驗ある成人の云へるには女子は男子に比して實着にして困苦に堪へ、精緻にして丁寧に且つ器用なりと、英米兩國婦人の差何ぞ夫れ甚しきや、英國婦女子の事を聞かば思ふに米國の女子大に感ずる所あるべし。

●家政、料理學校　エヂンボローに於ける家政、料理學校は愈繁盛の姿なり蓋だし今日社會に大ひなる必要あるが故なり其器具、貯蓄物のみにて其價三百五十磅なるが此外に尙千九百磅の資本あり、之を以て他に地面を求め、家を建て實地に家政、料理の學を應用せしむる爲め生徒を寄宿せしめ、家庭となすといふ、亦此學校を終へたるものには一家の妻君と爲りて差支へなき資格ありといふ證書を與ふるといふ。

●「ちゞれ毛直し」と「しらが染藥」は眞木松南堂にて賣捌く、無効なれば百圓進呈するといふ、廣告案に就て見るべし。

⊙通信員諸君に告ぐ　通信の字體は可成解る樣に御認め被下度候。

週報

●官令　二日勅令を以て公使館領事館費用條例中追加の件を裁可せらる●三日勅令を以て兵備品の出納を取扱ふ武官の身元保證金に關する件を裁可公布せらる●四日詔勅を以て貴族院伯子男爵議員選擧規則第十六條に依り明治二十四年八月五日を以て貴族院子爵議員一名闕員の爲めに補欠選擧を行ふべきとを命ぜらる●五日勅令を以て臨時博覧會事務局官制を裁可公布せらる●同日同令を以て海軍造船學校生徒手當金規則を裁可せらる●六日勅令を以て訴訟書類郵便送達手數料の件を裁可公布せらる●八日勅令を以て政府の債務に關し差押命令を受くる場合に於ける會計上の規程を裁可公布せらる●同日同令を以て陸軍砲兵會議條例の改正を裁可公布せらる●同日同令以て工兵會議條例の改正を裁可公布せらる●同日同令を以て陸軍定員令中改正の件を裁可公布せらる。

●政治　二日自由黨の辭職勧告書返却さる●同日「日本人」發行停止●八日東洋新報解停●同日東京市會開會●同日自由黨會議。

●雜報　五日ユニテリアン協會懇親會●六日東海悅部公判開庭●同日全國酒造家大會名護屋に開く●希臘親王殿下横濱に御入港九日米國桑港へ向け御出發●八日横濱ガゼツト新聞支配人兼持主ニゼー、アール、アングリー氏病死。

品名	十一月十六日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇七
四等米	一一一
五等米	一一七
正米（一円ニ付）	
越後米	一斗四升五合
美濃米	一四一
尾張米	一四四
肥後米	一四四
一志米	一四〇
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	三斗三升〇合
上州小麥	一五五
竹林麥	一五〇
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一四八
白胡麻	一二四
黒胡麻	一四五
鹽（一円ニ付）	
赤穂	三六七
大鹽	三七七
本鹽	五七〇
新鹽	六二〇
醬油（一円ニ付）	七分九厘　八五　八九　一一五　一三三　一六五　一八五　二一〇　二二〇　二五〇
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
味噌（一円ニ付）	
地製上白	七貫〇〇〇
同上赤	七、〇〇〇
同紅赤	五、〇〇〇

品名	十一月十六日
夏織物（一反ニ付）	五六　七〇　九二　一、一〇　八〇　九九　三七　五〇　五九　四〇　三二　三五　四四　二七　三〇　八〇　九〇　一、二五　一、四〇　四六　七三　七〇　一、〇六　三四　三八　二八　三五　四六　五四　四二　五〇　五〇　三八　七〇
伊勢改良縞	
同糸入縞	
笠井糸入縞	
佐織鼠縞	
同糸入縞	
同辨慶縞	
生機鼠縞	
同糸入縞	
同紺絣	
玉井正紺絣	
佐々絣	
物產縞	
糸入愛縞	
紺縫絞	
養老絞	
紺縫絞	
咲紺絞	
大和紺絣	
同白絣	
伊豫絣	
白木綿（一反ニ付）	
玉鶴	三、四五
綾鶴	三、七五
日ノ出鶴	四、〇五
若柳	三、二〇
稻岡	三、四〇
蓬萊	三、八九
古新	三、八一
間竹	三、七五
毛糸（百斤ニ付）	
[illegible]判	九八、〇〇
染分	九八、〇〇
中細	一一四、〇〇
極細	一一四、〇〇
靴下用	一三三、〇〇

品名	十一月十六日
製茶（一貫目ニ付）	
新山城飛切	二、七五
同稀大頭	二、三〇
同大頭	一、九〇
同中頭	一、七〇
新駿遠稀頭	二、〇〇
同大頭	一、五〇
同中頭	一、一〇
同中茶	九〇
新狹山稀頭	二、一〇
同大頭	一、六〇
同中頭	一、二〇
同中茶	一、一〇
乾海苔（百枚ニ付）	七〇　一、〇〇　四〇　一、〇〇　三五　一、〇〇　三五　八〇
洲崎	
大森	
深川砂村	
大師潮田	
鰹節（十貫目ニ付）	
薩摩大	一六、〇〇
伊豆上	一九、〇〇
房總上	一五、〇〇
銚子節	一四、〇〇
土佐大	一〇、五〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六、七〇
胡麻	九、二〇
荏油	九、八〇
桐油	六、五〇
綿油	……
坂水	七、八七
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	一、六四
デボース	一、六四
ホーミ	一、六八
ロシヤ	一、六〇

○色を白くするさぼんの元祖たる三能さぼんは

藥劑士大鐘立岱氏と製造人西條重兵衛氏と多年の實驗により主として男女全體の色を白くしにきびそばかす皮膚病及び諸傳染病の消毒に大効ある藥劑を配伍し調製したる物なり昨明治二十三年十月を以て弊店の發賣する所となり爾來日尚淺きも其効能の著しき事實に三能の名に背かざると愛顧諸彥の高庇により世に高評を蒙り弊店の幸福之れに過ぎず然るに三能さぼんの日に月に益々盛大なるを慕ひ數多の破廉恥商等種々まぎらはしき色を白くする○○さぼん或は何○さぼん又は何々と一雨毎に現出し何れも外見よく何分かの香氣を含み一寸素人好きのみするさぼんなり然るに實際功顯ある三能さぼんは返て容形あしく御使用中何となくざらつく氣みあれども是れ即ち藥力の致す處にして功能を主としたる證據なり三能さぼんは決して香氣や形容を主としたる○○さぼんの類にあらず又尋常化粧石鹸と異なるものなり今回從前の商標即ち玆に掲げたる洋裝婦人の圖を以て公然商標とし農商務省登錄御許可相成候に付御愛顧の諸君篤と右商標御覽の上他の形容さぼんに惑はされず愈御愛顧あらん事を江湖諸君に希ふ

●定價一個十錢郵税二錢郵劵代用不苦候但二錢切手に限る

右品各府縣下賣藥店又は和洋小間物店に取次販賣所御座候間御最寄にて御講求奉希候也

銀座一丁目

發賣本舖つやぶきん本店　佐々木玄兵衛

○北海孤兒院寄付金（第一回報告）

一時即納ノ分

一金壹圓 北海道紋鼈 菊地森藏
一金五圓 仝 札幌 ライト孃
一金貳圓 東京 マクドナルド氏
一金壹圓 仝 ハーデー氏
一金壹圓 仝 高田耕三
一金參拾錢 仝 富澤慶助
一金五圓 横濱 ブラッドホーム
一金壹圓 岩手縣盛岡 沖澤榮吉
一金拾錢 愛知縣名古屋 伊藤ヨシ
一金壹圓 青森縣弘前 弘前教會

一年全納ノ分

一金五百圓 岩手縣盛岡 ミロル氏
一金百圓 北海道箱館 中川嘉兵衛
一金壹圓 仝 小鷹精太郎
一金五圓 仝 土橋藤市
一金壹圓 東京 横倉太十郎
一金五拾錢 仝 青山守
一金五圓 仝 田村直臣
一金拾錢 靜岡縣大宮 秋山理太郎
一金貳拾錢 仝 角田泰三郎
一金貳拾錢 仝 久保田福次郎
一金參拾錢 仝 高木松太郎
一金參圓 北海道室蘭 穴澤忠吾
一金壹圓 青森縣黒石 瀧江嘉三耶
一金參圓 埼玉縣 足立教會
一金壹圓廿錢 岐阜縣 高取熊太郎
一金參圓 千葉縣千葉町 長島平治郎

二年分納ノ分

一金貳拾四圓 東京 イーストレーキ氏
一金參圓 山形縣鶴岡 大石憲英

三年分納ノ分

一金四拾圓 北海道箱館 相馬理三郎
一金參拾圓 仝 紋鼈 小野貫一郎
一金拾五圓 仝黄金蘂村 増田大吉
一金貳拾圓 仝 幌別 片倉景光
一金拾五圓 仝 室蘭 高島藤吉
一金拾圓 仝 紋鼈 中澤正
一金拾圓 仝 岩松靜司
一金六圓 仝 目黒儀三郎
一金六圓 仝 黒川晋
一金五圓 仝 室蘭 松田精一
一金貳拾圓 仝 箱館 永田礪
一金拾圓 仝 齋藤壬生雄
一金六圓 仝 岩谷幸助
一金參拾圓 仝 大岡圓次郎
一金參圓 仝 栗田壽吉
一金拾貳圓 仝 岩谷ヨシノ
一金六圓 仝 相馬キン
一金參拾圓 青森縣青森 高橋穀
一金參拾圓 東京 岡見清致
一金拾圓 仝 岡見仙吉郎
一金貳拾圓 仝 本郷定次郎
一金九圓 仝 水野豊
一金參圓 仝 菅直太郎
一金參圓 仝 小田眞賀
一金參圓六拾錢仝 青木金太郎
一金九圓 仝 江原素六
一金五拾圓 靜岡縣濱松 三宅長策
一金拾五圓 岩手縣盛岡 三浦徹
一金拾圓 仝 多田綱宏
一金拾圓 仝 木村守
一金六圓 仝 小谷野敬三
一金參圓 仝 村木經吉
一金五拾圓 宮城縣仙台 岩井長太郎
一金九圓 仝 松木總吾
一金拾五圓 仝 天野三郎
一金五圓 仝 三浦宗三郎
一金參圓 仝 島貫兵太夫
一金八圓 仝 大和田虎太郎
一金拾圓 仝 眞山眞
一金壹圓八拾錢仝 田中兎毛
一金四圓五拾錢仝 宮本六兵衛
一金參圓 仝 唐澤造酒
一金參圓 仝 橋本經光
一金六拾圓 仝 ホーイ氏
一金拾圓 仝 藤生金六

四年分納ノ分

一金貳百五拾圓（内半額四年分納） 北海道黄金蘂村 田村顯允
一金百圓 北海道紋鼈 齋藤眞知
一金百圓 仝 林竹太郎
一金六拾圓 仝 小山田虔
一金六拾圓 仝 岩木久米三郎
一金五拾圓 仝 鎌田武三郎
一金五拾圓 仝 皆川正吉
一金五拾圓 仝 鷲別 日野愛憲
一金五拾圓 仝 札幌 赤城信一
一金五拾圓 仝 島田操
一金貳拾圓 仝 紋鼈 伊藤逵
一金貳拾圓 仝 村木孝英
一金拾五圓 仝 鷲別 須田市十郎
一金拾圓 仝 紋鼈 大堀直祀
一金貳圓 仝 遊佐瀟
一金貳圓 仝 大堀良雄
一金貳圓 仝 稀府 黒澤次郎
一金拾圓 仝 紋鼈 兵頭保則
一金貳拾八圓東京 植村正久
一金貳拾圓 仝 南德太郎
一金拾圓 横濱 日下部金幣
一金參拾圓 宮城縣仙台 押川方義

五年分納ノ分

一金五拾圓 北海道室蘭 最上谷市五郎
一金拾圓 仝 箱館 鎌田善三郎
一金五圓 仝 大塚十郎
一金拾圓 仝 矢野鏡太郎
一金五圓 東京 奥野昌綱
一金五圓 仝 市川エイ

六年分納ノ分

一金八圓 北海道紋鼈 大槻宗之進

十年分納ノ分

一金拾圓 横濱 山本秀煌
一金貳拾圓 仝 渡井千代

十五年分納ノ分

一金參拾圓 北海道紋鼈 黒川大治郎
一金拾五圓 仝 齋藤清

小計金貳千四百八十七圓八拾錢

明治廿四年六月 創立委員

北海孤兒院創立規則摘要

第一條 我儕は北海道に於て一の孤兒院を設立し本邦無告の孤兒を育養し北海孤兒院と稱す

第二條 本院は北海道膽振國虻田郡虻田村字ニナルカに設立す

第三條 本院は慈善家の寄付金を募りニナルカの地三百萬坪を開墾し其收益を以て維持するものとす

第四條 本院は品行方正身体強壮にして飲酒を爲さゞる小作人百戸を招集し開墾を爲さしむ

第五條 本院は五期に分ち十五ヶ年を以て其開墾を成功するものとす

第六條 本院の要する豫算は金貳萬九千〇六拾八圓なり（但第一期三年間に要する分は五千八百拾貳圓なり）

第七條 本院は寄付金の種類を分ちて一時皆納數年分納の二種とす

第八條 寄付の豫約書は創立委員に送り其金員は毎年十二月十五日迄に創立委員にあてたる爲換を以て北海道膽振國有珠郡西紋鼈郵便電信局へ振込むものとす

創立委員
北海道膽振國有珠郡黄金蘂村一番地 田村顯允
同道同國同郡東紋鼈村百二十九番地 林竹太郎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

金百圓進呈

ちゞれけ直し

如何ある縮毛にても一度にて全く直り。一生戻らぬと受合の藥あり。定價三十錢。郵稅四錢

しらが染藥

むす杯の世話なく。卅分間にて眞黑に染まり。一代はげぬと保證●定價廿錢。郵稅四錢

右御自分にてつけると面倒と御召す御方は御來駕あれは奇麗に染めて上げ升●もし無効の時は百圓進呈

本舖（染）牛込區市ヶ谷田町二丁目卅番地　眞本松南堂
支舖（所）神田區今川小路二丁目十一番地　三澤松南堂

婦人下宿

婦人下宿は左の契約を結んで營業を致します

方に有るまじき事をなさるゝ御方と

夜分の外出を多くあさるゝ御方の入

は御斷り致します○非常の時の外男

子を室内へ御招の義も右同樣御斷り

婦人下宿は本鄕區弓町二丁目三番地大川つわ

基督のすがた

（定價廿五錢）

本書は蘇格蘭の壯年宣敎師中にありて屈指の秀才なるゼーム ス、スタウカル氏の近著にして文脉の明了ある結搆の斬新なる所見の該博なるを以て著われ歐米のクリスチアンにして本書を一讀せざるものは殆んどこれなき有樣なり今植村正久、田中達の兩氏本書を合譯せらるその祈禱冥想の伴侶、人生の指南車となすに適せるとは弊舖等毫も之れを疑はず願くは續々購讀の榮を賜へ

發行所　東京麴町區三番町拾番地　南海社
發賣所　東京築地二丁目二十二番地　一二三館
同　大坂西區土佐堀三丁目　福音社

明治女學校資義捐音樂會目錄

來二十日午后二時帝國ホテル開會

第一部

（一）演說　島田三郎君
（二）洋琴連彈　ソナタ○ベトーベン作　新井さく子　佐藤てつ子
（三）唱歌　埴生の宿　明治女學校生徒諸氏
（四）獨唱　天地○ヒンシユチ作　ミス、モルトン
（五）洋琴　ギラルダ（舞踏曲）　納所辨二郎氏
（六）唱歌　晴朗中夜○アーサー、アリバン作　フエリス女學校生徒諸氏
（七）三曲合奏　都の春　山勢松韻氏外數名
狂言　吹取　シテ三宅總三郎氏　乙何某　山脇元治氏　三宅藤造氏
薙刀　明治女學校生　〔松井まん子―河野たけ子　佐藤すけ子―鈴木げん子〕
落語　圓朝

第二部

（一）洋琴　ミセス、グリーン
（二）薩摩琵琶　田原元倚氏
（三）復音唱歌　歐二曲　ミス、ランド　ミス、ハート
（四）女王ドグマ　ミス、プリンス
（五）獨唱　ミセス、チーチエ
（六）三曲合奏　みだれ　山勢松韻氏外數名

以上

切符　上等　金一圓
同　並　半圓

大賣捌　女學雜誌社

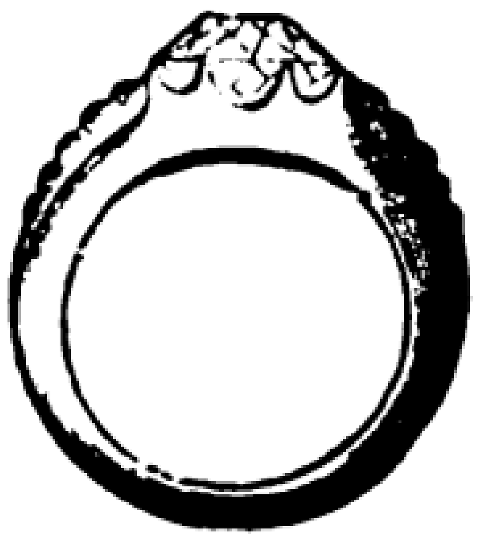
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

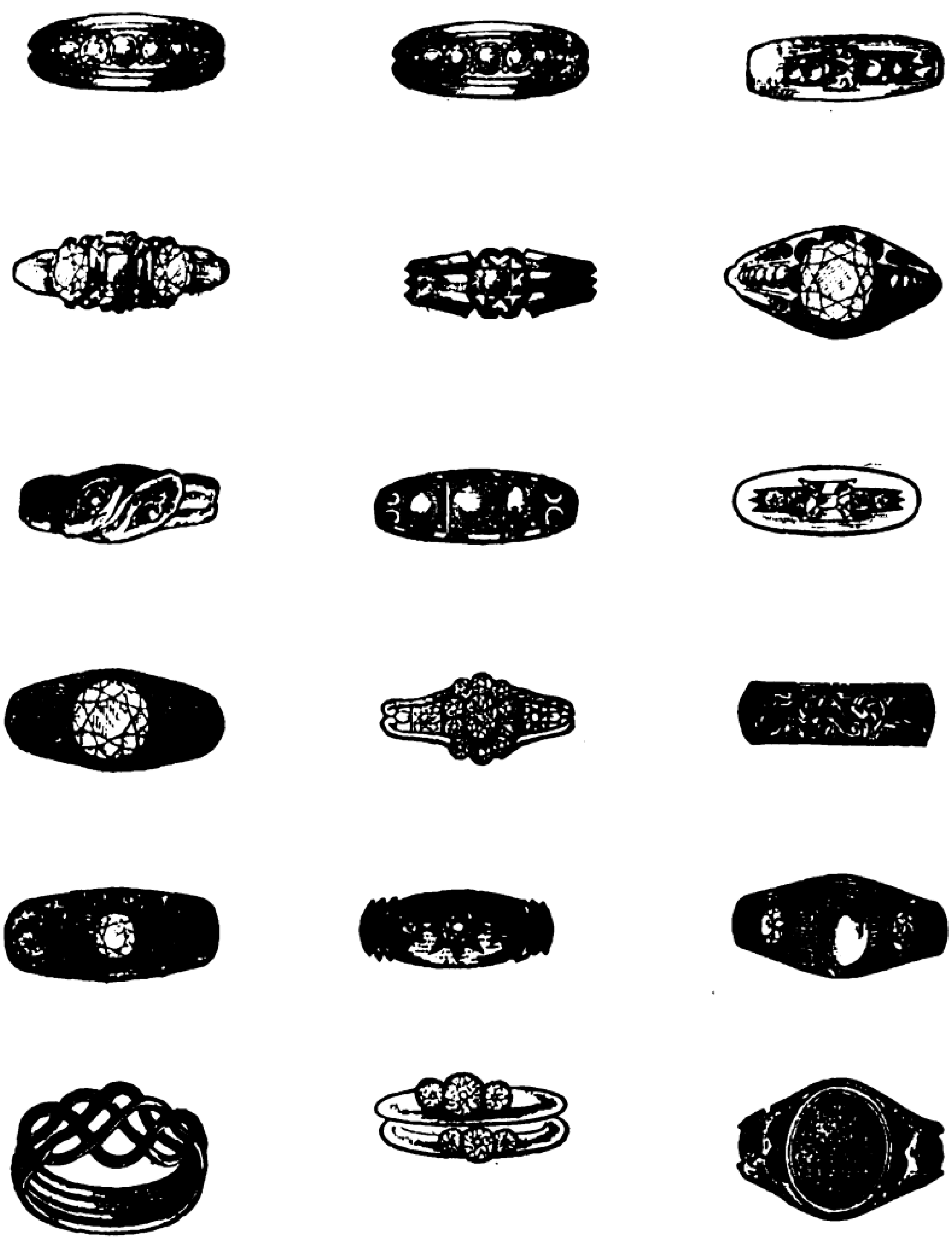
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天賞堂發賣品第三　指輪ノ部



ダイアモンド、サッフイヤ、リユビー、エメ

ラルド、ヲパル各寶石入及見留印付(篆刻應貴囑)各種



●此他貴金屬細工物隨御好調進仕候也

東京京橋區尾張町二丁目十八番地
電話番號三百三十三番

天賞堂